

巻き戻り冤罪令嬢ですが、

もふもふ幼女の継母になりました

主な登場人物

MAIN CHARACTERS

セレイブ

辺境伯令息。
その美貌と騎士としての腕で
世界中に名を馳せている。

ライハント

巻き戻る前
リシエラを処刑した
元婚約者。

マイア

ライハントの
姉にして第一王女。

リシエラ

冤罪で処刑され巻き戻った令嬢。
聖女の力で動物と会話できる。

ミュナ

猫耳の少女。
人間の言葉が苦手。

ジンジャー

セレイブが従える犬の魔獣。

???

謎の白い猫。
ミュナを気にしている様子。

プロローグ

婚約破棄だけで済んだら、ただ泣いて終わっていたでしょう。
それなのにあなたは、罪まで私に押し付けて——断頭台に立たせるのですね。

「毒薬で王国を汚した魔女！ リシエラ・マリスヒルに死を！」
その声はかつて、「リシエラを守る」と誓った人のもの。

ライハント王子は囚人服の私には目もくれず、広場に集まる群衆を見つめています。
雪が頬に落ちて、もう冷たさすら感じません。

「まあ、お義姉様（ねえさま）つたら惨め（みじ）！ エレナは殿下の婚約者なのに——！」

彼の隣でわざとらしく笑うのは、元義妹のエレナ。派手に巻いたピンクブロンドに、滑稽（こっけい）なほど飾り立てたドレス。彼女は勝ち誇るように、ライハント王子の腕に絡みついています。

エレナなら、父上も母上も納得する……

独房で聞かされた、彼の言葉でわかりました。

最初から、私と結婚するつもりなんてなかった。

「おまえのことは、それなりにかわいがってやっただろう？　だがな、バレたら終わりなんだよ」
ライハント王子は、私以外には聞こえないくらいの小声で呟きました。

あなたの言葉って、嘘ばかりですね。

私の力を利用して、自分の罪をごまかそうとした。それが限界になったら全部、私のせいにして。あなたを信じていたから、動物のことを話したのに。

「誤解を解きたい」って言葉まで、嘘だった……

本当はあの子たちを捕まえて、お金に変えるためだったんですね。

「魔女は哀れだ。だが俺は次期国王。王国のために、ここで処刑する義務がある！」

群衆の怒号と一緒に、石や腐った果物が飛んできました。

それでもいいから、食べたい……最後に食事をしたの、いつでしたっけ。

家族も愛も、とつくに諦めました。でも、せめてごはんを……あれは？

怒り狂う群衆の中、フードを深くかぶった人物が私を見つめています。

壊れた道具を眺めるような、冷たい金の瞳。でも口元には満足そうな笑み。まるで望みが叶ったかのように。

「見てよ、このドレス！」

キラキラ光るドレスが目の前で翻り、視界が遮られました。

エレナはその裾を持ち上げ、得意げに一回転しました。

「ふふっ。殿下におねだりした、王族しか持てない金糸入りよ！　羨ましいでしょ、お義姉様？」

「いえ、まったく」

「なっ、なによ！　エレナの引き立て役のくせに！　欲しがりなさいよ！」

「残飯の方がマシです」

「っ！　もういいわ！　さっさと処刑して！」

衛兵たちは私の腕をつかみ、雪の積もる断頭台に縛りつけました。

エレナの高笑いが響きます。

「真っ白な墓場を、真っ赤に染めなさいよ！　最期くらい派手にね！」

最期……

それならせめて、誰かと笑いながら、あれを食べたかった……

いいえ。

本音を言えば、最期なんて嫌です。生きて、誰かと笑いながらあれを食べたい、あれを……あれ？

私、なにを食べたかったのでしょうか。

私の大好きな――

――れ……

？　今、なにか聞こえたような。あつ、粉雪がきらめいています。最期の幻でしょうか？

――れ……　だよ

「れ……だよ？　あれだよ？」

もしかして、あれの名前を覚えてくれている？ もう一度……お願い。もう一度だけ……
——かれに あうんだよ

あつ、その声……！

広場の喧騒が遠ざかっていきます。雪が虹色に舞い上がり、私の身体を包み込むと暖かくて心地よくて、まるであれを食べたときのようです。

思い出しました。私がずっと願っていたのは、あれ——

「——アップルパイが食べたいです！」

声とともに、ガバツと身体を起こします。

こんな大切なことを忘れるなんて、空腹とは恐ろしい。

「あれ？ 拘束具が……付いていない？」

それに断頭台も、嘘つき王子も、エレナも見当たりません。

あるのは懐かしい景色。

カーテンのない窓、差し込む陽光、剥がれかけた天井。この服、あのころのメイドのお下が
り……えっ？

「この部屋……ま、まさか！」

傾いたベッドから飛び降り、窓を開けます。

遠くに見えるのは、マリスヒル伯爵邸。

「ここ、私の暮らしていた小屋？ でも、どうして……」

呆然としていると、小さな影たちが地面を走ってきます。

リスに野ウサギ、それにアライグマ。

ライハント王子に捕まり、戻ってこなかった友達です。

『『リシエラ、二十歳の誕生日おめでとう！』』

えっ？ 私、二十一歳です。そしてさっき、断頭台で処刑されました。でも、まさか……

おそろおそろ首元に指を這わせてみます。くっついていきます。

『ジャーン！ オレたちから誕生日プレゼントだ！』

リスから小さな麻袋を渡されました。記憶が正しければ、この中には木の実がたくさんあって、
ひとつだけ、とても珍しいハート形が……

「……」

『おーい、どうしたリシエラ？ 急に固まっちゃってさ』

『も、もしかして、気に入りませんでした……？』

『リシエラの反応は予想外だ。詳細な感想を求めたい』

私は思わず、彼らをぎゅっと抱きしめました。

「嬉しいですよ！ 私の大切な友達がいてくれて、本当に嬉しいですよ！」

『イエーイ！ オレたちだって、リシエラがいてくれてサイコーだぜ！』

みんな笑っています。生きています！

もしかして私は、処刑された記憶を持ったまま、一年前——二十歳の誕生日に戻っているのでは？

そういえば、処刑される直前、懐かしい声が聞こえました。

幼いころ、私は空の向こうにいる『誰か』と、よくおしゃべりしていました。

好きな食べ物のこと、明日なにを食べたいのか……そんな他愛ないつぶやきに返ってくる、不思議な声。

今でも、それが誰だったのかはわかりません。でも……

——昔々、誰とでもお話のできる聖女様がいました。

おとぎ話が好きだった幼い私は、流行り病で亡くなった母が聖女になって、空から見守ってくれていると信じていました。

この小屋に住むようになってからは聞こえなかったのに、どうして今になって？

そういえば巻き戻る前、なにか話してくれたような……でも、今は思い出している暇なんてありません。

私は知っています。このままでは私たちの命が奪われてしまうことを。

でも養家と決別し、ライハント王子から逃げられれば、未来は変えられるはずです。

「みんな、協力してほしいことがあります！」

私は動物たちと輪になって計画を話すと、彼らは笑い出しました。

『ふむ！ リシェラの誕生日パーティーならば、盛大にすべきだろう！』

『ブルブル、武者震いが……で、でも、奴らはもつとブルブルさせます……』

『よっしゃ！ あの気に食わない連中、パーツとやつちゃおうぜ！』

「みんな、ありがとうございます！」

動物たちは力強く頷き、風のように散っていきました。

私も負けていられません。

壊れかけの引き出しから便箋を取り出すと、あの養家が積み上げてきた罪の数々を書き連ねています。

もう、処刑の未来を繰り返したりしません。

あの絶望の記憶——それを私の切り札にします。

出立の準備を整えた私は、マリスヒル伯爵邸に向かいます。

一家の趣味が丸出しのキンピカ像を通り過ぎたところ、下品な笑い声が聞こえてきました。食堂の扉を開けると、食器がカチャカチャと鳴り、スープをすすする音まで耳に飛び込んできました。

養家は相変わらず、お行儀がよくありません。

「ねえお父様、お母様！ エレナがかわいいご褒美に、豪華なパーティーをしてほしいわ！」
「もちろんだとも！」

「エレナのパーティーですから、派手にしましょう！」

養家は私の誕生日など目もくれず、エレナのがままで盛り上がっていました。

「エレナは本当に美人だ。あの不気味な化け物とは大違い……」

「それ、私のことですか？」

「ヒッ！」

養父母は私に気づくと、気味の悪いものを見たように青ざめました。

この国では動物が「魔女の手下」と呼ばれ、忌み嫌われているせいです。

だから動物と話せるようになったとき、養父母は私を壊れかけの小屋に押し込め、人目から遠ざけました。

あの日から、彼らは私を汚物のように扱っているのです。

「リシェラ、ワシらの前に現れるな！ また飯を抜かれたのか！」

「物乞いなら、使用人に残飯でもねだりなさい！」

養父母が声を荒らげる中、エレナは優越感に浸った笑みを浮かべています。

「お義姉様ったら、相変わらず泥色の髪と目……パツとしないわね！」

「これはお母様譲りの色なので、私は気に入っています。でもエレナは……いつそんなに『変身』したのでしたっけ？」

「なっ、なによ！ エレナがかわいいのは生まれつきなの！ だからお義姉様と違って、盛大な誕生日パーティーをしてもらえるんだから！」

「そうよ。エレナに比べて化け物は……」

「まったく、縁談のひとつもない！」

「エレナが社交界で、私の悪口を流しているからではありませんか？」

「なんだとっ！ エレナに文句をつけるのか！」

「いいえ、感謝しています。身売りしなくて済みました」

養父はギリギリと歯噛みしながら、顔を赤くしています。以前の私は食事を抜かれる恐怖で口答えしなかったので、こうして反論するのが気に食わないのでしょうか。

「化け物のくせに、伯爵家の娘だと勘違いしているのか!? 最初から我が家にはエレナがいた、おまえを娘だと思ったことはない!」

「では、こちらにサインをお願いします」

私は微笑みながら一枚の紙を養父に差し出します。養父母の顔色がみるうちに青ざめました。
「絶縁宣誓書!」

「どっ、どうしてこんなものを……!」

「先日、使用人たちに投げつけられました。『おまえはマリスヒル伯爵家の娘じゃない』と」
背後に控える使用人たちは顔を背け、知らないふりをしています。

彼らはエレナに取り入ろうと、私の食事を残飯にしたり、わざと捨てたり、仕事を押し付けてきたりとやりたい放題でした。この絶縁宣誓書も意地悪のつもりだったのでしょうか。でも今回ばかりは、ありがたく使わせていただきます。

絶縁宣誓書を持つ、養父の手が震えています。

「私を娘だと思ったことはないのに、なぜためらうのですか?」

「おまえがいなくなったら、送金が……そうか! あの金を狙っているんだな? ははははっ! そんなもの使い果たしている!」

養父の家には、私の教育費という名目で多額の資金が送られていました。

それは私が養女になるとき、私の実父——ブリザーイェット前侯爵と交わした契約でした。

マリスヒル伯爵家ではそれを、私の学びのためではなく、自分たちの利益のために使っていま

した。

そのことは巻き戻る前、「もう金にならん、用済みだ!」と怒鳴られたときに知ったのです。

あのときは傷つきましたが、もう彼らのいいようにはされません。

「もう成人していますので、教育費の支給は不要です」

「……そうか、今日はおまえの誕生日か! 未成年でなければ、教育費は入らん……つまり、おまえは用済みだ!」

元養父からサイン入りの紙を受け取ると、心が軽くなりました。

エレナと元養母は高笑いしています。

「お義姉様はもう貧乏平民! あはははっ!」

「さっさと出ていきなさい!」

「では、本題です。私の教育費、ブリザーイェット侯爵家からの支援金を、全額返金していただきます」

「「はっ?」」

「さらに、不正使用への謝罪と違約金の支払い。それが私からの要求です」

元養父母の顔が凍りついたかと思うと、すぐ真っ赤に染まります。

「ふっ、ふざけるな!」

「養女の教育費をどう使おうと、私たちの勝手よ!」

彼らは不正を認めるつもりがないようです。

自ら認めれば、和解という形をとり、返金と違約金だけで済んだかもしれないのに……でもこの件については、すでに準備済みです。

動物たちと話し合った後、あの小屋ですべてを書いた手紙。養家の罪を暴く証拠は今、私の手元にあります。

「返金は当然です。支援された教育費は、私が伯爵令嬢として教養を身につけるためのものですから。あなた方が浪費するためのお金ではありません」

「知らん！ あの教育費は裏取引……ゴホンっ！ 必要経費だと帳簿に書いてある！」

「使用人に偽装させたのですよね？」

「黙れっ！ 今すぐここから叩き出されたいのか！」

「怒鳴っても、記録は消えませんよ」

「なんだとっ、ワシを愚弄するののか！」

「ただ知りたいだけです。不正に手に入れた品はどこですか？ どこに隠しているのですか？」

「隠し部屋など知らん！」

食堂は凍りついたかのように静まりました。

元養父のフサフサ頭から、冷や汗がつうつと流れていきます。

「ええいっ、卑怯な化け物め！ 侯爵家の厄介者だったおまえを引き取ってやったのに、この恩知らずが！」

元養父が椅子を倒して立ち上がり、怒りに任せて私に手を振り上げました。

そのとき彼の足にネズミが飛びついて、キュツと小さく鳴きます。

「ぎゃあああっ！」

勢いよく転んだ元養父に、壁の隙間から現れたネズミの群れが一斉に飛びかかります。

「おいっ、リシェラ！ これはおまえの仕業っ、耳いいっ！ 鼻をつ！ 頭をかじるなああっ！」

「そっちに出たわ！ そっちにも！ そっちにもそっちにもそっちにもっ！」

「いやあああっ！！」

元養家に絶叫が響く中、使用人たちは我先にと逃げ出しました。

「誰かつ！ お、お義姉様っ！ 助けっ、たすけてええっ！」

「後悔しても、もう遅いですよ？」

私は邸を後にします。叫び声がしても振り返る気はありません。

門を出ると、動物たちがあちこちを跳ね回っています。

「パーティーの準備は順調のようですね」

宴の盛り上げは、頼もしい友達にお任せして。

私は奪われた未来を取り戻すために、この手紙を最初の一手として届けに行きます。

◆ 元養父 マリスヒル伯爵の不正 ◆

忌々しい害獣が食堂から去ると、あの化け物娘はすでにいなかった。

窓のない隠し部屋でひとり、ワシは裏取引で手に入れた禁制品を確認する。

「……すべてあるようだ。ははは、これさえあれば復活、フッサフサだ！」

ワシは鼻歌まじりで薬瓶を取り出し、頭皮に最強毛生え薬を塗布する。

「妻は激ヤセ薬、エレナは超美女薬……もう手放せん！」

だが裏取引の品は法外な値だ。領地収入だけでは足りない。

そこでワシは裕福なブリザージェット前侯爵の娘、リシエラを養女にして多額の教育費を手に入れる計画を立てた。

「あれは急ぐ必要があった。妻のお腹が目立ちはじめたころだったからな」

ブリザージェット前侯爵は好色で、家庭に興味がないと有名だった。

こちらから都合のいい女を送り込めば、財布の紐も、口も緩む。チャンスはすぐ巡ってきた。

「前妻の娘を引き取ってくれと来たもんだ。もちろん、たっぷり教育費付きでな」

後妻は前妻の娘を疎ん^{うと}でいたらしい。後妻の機嫌を取りたい前侯爵にとって、ワシという引き取り手は渡りに船だっただろう。

「まあ、ワシが思っていた以上に、送り込んだ愛人は強欲だったが。前侯爵を刺して、挙句の果てにふたりとも落下死……全部、自業自得さ」

ワシは悪くない。勝手に死んだのは奴らだ。

その後、遺された幼児がブリザージェット侯爵となり、その母親である後妻が侯爵代理として切り盛りしている。それでも教育費の支払いは続いており、ワシは不満もなかった。

「だがリシエラが成人し、教育費の送金はもうない。どうすれば……」

隠し部屋から私室に戻ると、執事が慌てた様子でやってきた。

「なに？ ライハント王子が、リシエラに会いたい……だと？」

「極秘でと」

リシエラがワシの養女となつてからは、ライハント王子があいつに会いに、しょっちゅう訪ねてきた。

ワシの妻はそれを悔しがった。そしてライハント王子の興味をエレナに向けさせようと、来訪日にリシエラを山奥へ置きざりにした。

しかしあの化け物……本性を現した。「動物と話せるようになって、道案内をしてもらった」と笑いながら、獣を従えて戻ってきた。

あれから、ライハント王子はマリスヒル伯爵邸に寄りつかなくなった。

もし奴がリシエラの邪悪な力を吹聴すれば、ワシの立場が危うくなる。ずっとヒヤヒヤしていたが、なぜ今さらになつてあいつに会いに来たのか……わからん。

「殿下、ようこそお越しくださいました」

ライハント王子は金色の髪と瞳を持つ、見た目はいい男だ。おかげで国内の令嬢たちからは、ちやほやされている。

待てよ、リシエラがいなくなった今こそ、エレナを売り込めるのではないか？

そうか、これは絶好の機会！ エレナが嫁^{よめ}げば、ワシは次期国王の義父！

王国からの金がドバドバ、夢のように流れてくるってわけだ！
ワシは得意の猫なで声で媚を売った。

「本日はどのようなご用件で？ 私の愛娘のエレナは、とても美しく……」

「そのようだな。父上も母上もエレナの容姿を気に入っていた」

だがライハント王子は違うのか、つまらなそうな顔で言った。

「そこでマリスヒル伯爵、エレナを俺の妻にしないか？」

「そ！ それは喜んで！ では――」

「問題がひとつある……リシェラだ。エレナの義姉が獣と話せると知られば、この話は成立しない」

ありえる話だ。ソディエ国王夫妻は獣を嫌悪している。

「だからリシェラを俺に引き渡せ。その後のことは……聞かない方がいい。これは前金だ」

ライハント王子は革張りのトランクを開く。そこには目もくらむような金貨がきらめいていた。

ワシはゴクリと生唾を飲んだ。

これはリシェラを買い取るための金、人身売買だ。国際法では重罪……だが、それがどうした！

ワシは欲望のまま目の前の輝きに手を伸ばす。

「リシェラを引き渡せるな？」

「そ、それが……あれはエレナの付き添いで不在なのです」

とつさのでまかせに、ライハント王子の眼差しが鋭くなる。

しまった。リシェラは絶縁して追い出したばかりだ。

「まあいい。明日、引き取る用意を終えてから来る」

明日……時間がない！

ワシはライハント王子を見送り、邸の前庭に使用人を集める。

「リシェラを捕まえた奴に金貨一枚をくれてやる！ 早い者勝ちだ！」

「金貨ア!？」

「私がもらうわ！」

「バカ言え、俺が先だ！」

晴れ渡る空の下、金貨に目をギラつかせた使用人たちが一斉に駆け出していく。

ははは、これならすぐ見つかる！

だが……リシェラはなぜ、ライハント王子が来ることを知っていたかのようなタイミングで去ったのだろう。

まあ、気にするだけムダだ。そう思おうとしても、胸騒ぎがどうにも収まらない。

「獣がまったく見当たらないな……」

いつもならせいせいするはずが、嵐の予兆のように静まり返って……いや、なにか聞こえる。

低く不気味な音とともに、足元が震え出す。

目の前に広がる光景に気づき、思わず息を呑んだ。

「あれは、獣の大群!？」

大地を揺るがす猛進だ。その勢いはとどまるところを知らず、逃げ惑う使用人たちを次々となぎ倒していく。

「二ギャアアッ!!」

野ウサギが顔を蹴飛ばし、リスの行列が服の中へ侵入する。アライグマを背に乗せたイノシシが、地響きを立てて突進する。

悲鳴が飛び交う中、獣たちの勢いはさらに増し、ワシの邸を襲った。

「ギャッ! やめなさい! これは私のものよ!!」

妻の悲鳴もむなしく、獣たちは邸を蹂躪しながら外へ飛び出した。その手や口には見覚えのある宝石、そして書類……まさか!

「それは、ワシの裏帳簿! 裏取引の品つ、毛生え薬まで! やめろおっ!!」

ワシの声を聞き、獣の波が向かってくる。恐怖で足がもつれ、そのまま地面に転がった。

「ヒイツ、や、やめ……来るなああっ!」

混沌とする中、すべての元凶である、あの娘の去りゆく姿が脳裏をかすめる。

——後悔しても、もう遅いですよ?

だが、これがリシエラの用意した罰の、ほんの序章だったとは。

このときのワシには、知る由もなかった。



そろそろライハント王子が、マリスヒル伯爵に私の売買を持ちかけているはず。でも、追手の気配はありません。

「取引を邪魔する作戦がうまくいったようですね!」

そして友達に教えてもらった道を進むと、湖の点在する渡りの森にたどり着きました。

上空では白い大鳥の群れが旋回しています。

『あら、リシエラじゃない!』

そのうちの一羽、白亜鳥の長が舞い降りました。

『会えて嬉しいわ。暖かくなってきたし、そろそろ北へ向かうつもりよ』

「すぐ出立することはできますか?」

ライハント王子が最初に私を欺いたのは、『白亜鳥たちを救う』という嘘をついたときでした。私はその嘘を信じて、白亜鳥が明朝まで滞在すると彼に教えたのです。

「今夜、ライハント王子の命を受けた密猟者が来ます。あなたたちの羽毛を狙って」

『そんなことが……リシエラ、教えてくれてありがとう。さっそく出発するわ』

「もしよろしければ、私も一緒に連れて行ってもらえませんか?」

白亜鳥たちの向かうブリザード候爵領には、母の故郷へ続く航路があります。

絶海のフロスベイン諸島までは、元養父もライハント王子も追いかけて来ないでしょう。

『もちろんよ、リシエラが一緒なら楽しいわ!』

「ありがとうございます！」

私が大鳥の背に乗ったそのとき、前方の梢で小さな影が動きました。

「……あれは？」

木の上に目を凝らすと、赤毛の少女が見えました。まるで風のように、枝の上を駆け回っています。

「ひゃっ！ どうやって登ったのでしょうか？」

『あの子、一刻ほど前からいたわよ』

近くには誰もいないようです。迷子でしょうか？

『私も気になって近づいたのだけど、驚かせてしまったみたい。人とは思えない速さで木に登って逃げたわ』

「まさに、人間離れた身のかなしですね」

でも枝が折れたら、落下して怪我をしてしまうかもしれません。

私は白垂鳥の背から降り、木の幹に近づいて、少女を見上げました。身につけている上着は暖かそうで、高級感があります。どこかのお嬢様でしょうか。

「こんにち、っ！」

思わず息を吞みました。

少女の赤リンドゴのような髪、その横からちょこんと出ているのは――

「猫耳？」

スカートの裾から見えるのは、ふわりと揺れる長いもふもふの尻尾。

私は驚きつつも、その愛らしさに頬が熱くなってきました。

「かわいい……！」

はじめて見る姿なのに、なんてかわいい……かわいすぎて悶えてしまいます！

猫耳の少女は挙動不審な私に気づいたようです。木の幹にしがみつき、野生の子猫のように警戒しています。

その様子を胸をときめかせていると、猫耳の少女は私の腰の辺りを指しました。

『……いいにおい』

「！」

今の、猫語では？

見た目だけではなく、言葉まで……

私は心を落ち着けるように、深呼吸しました。動揺に勘づかれたら、さらに警戒されてしまいます。

「この匂い、わかるのですか？」

『きのみ、いっぱいね』

ポケットの中にある木の実に気づくなんて、驚くほど鋭い嗅覚です。

「よろしければ、食べませんか？」

猫耳の少女は木の幹にしがみついたまま、スルスルと地上へ下りました。



私はその場でしゃがみ、目線の高さを合わせます。

はじめて会う動物には、そうした方が安心してもらえるのです。

「木登り、お上手ですね」

猫耳の少女は木の陰に隠れました。でも頬を赤らめて、木の陰からこちらをチラチラうかがっています。照れているような、嬉しいような、そんな様子です。

「この木の実、どうぞ」

袋を差し出すと、緑の瞳をキラキラさせて……あつ、近づいてきました。

ぱつちりとした目の、整った顔立ちをしています。将来が楽しみになるような、本当にかわいい子です。

『すごい、たくさんね!』

「味もいいですよ。好きなだけどうぞ」

猫耳の少女は夢中になって頬張りはじめました。ポリポリ食べる音まで愛らしくて、頬が緩みます。

「この森へは誰かと来たのですか?」

『ミュナ、ひとり』

「お嬢様……いえ、ミュナ様は——」

『ミュナ! ミュナサマちがうね、ミュナ!』

服装からお嬢様だと思いましたが、名前だけで呼ばれることに慣れているようです。

「はじめまして、ミュナ。私はリシエラといいます」
『リシエラ？』

「はい。リシエラです。ミュナはどこから来たのですか？」

「木のあるところ！ だから、さがすね、オモチ！」

「……オモチ？」

聞き覚えのない言葉です。

ミュナは『オモチ』を探して、この森に迷い込んだのでしょうか。

白亜鳥にも聞いてみましたが、『知らないわ』と首を傾げています。

『リシエラ、夕暮れが近づいているわ。そろそろ北の地へ行きましょう』

白亜鳥たちは密猟者がやってくる前に旅立った方が安全です。

でもミュナにはきつと、待っている人がいます。

（リシエラお嬢様……ご無事でよかったです！）

昔、迷子になった私を心配していた乳母が——おばあちゃんのように抱きしめてくれたぬくもりを思い出します。

なによりミュナのかわいい猫耳を誰かに見られて、巻き戻る前の私の友達のように、ひどい目に遭つたら……そんなの絶対に嫌です。

「白亜鳥さん、私はこれからミュナを保護者のもとへ送り届けることにします」

『そう……リシエラと一緒に来ないのは残念だけど。でも迷子の幼女を放っておけないなんて、や

さしいあなたらしいわ。すっかり懐かれたようだし』

ミュナは木の実を食べ終えても、私のそばから離れようとしません。小さな手で、私の服をしっかりつかんでいます。

私は小屋で書いた手紙を、白亜鳥の脚にしっかりと結びつけました。

これで元養家の罪は明るみに出るでしょう。

「この手紙を、ブリザージェット侯爵家へ届けていただけますか？」

『任せて！』

白亜鳥の長は軽やかに舞い上がると、仲間たちとともに青空を渡っていきます。

「みんな、どうか無事で……！」

私とミュナは手を振り、その旅立ちを見送りました。

「ミュナ、耳と尻尾が見えないように隠すことはできますか？」

『できる！』

ミュナは長い尾をスカートの内側に器用にしまい込み、猫耳のついたフードをかぶります。その上に両手を乗せて、隠した耳をしっかりと押さえました。

一生懸命な様子がかわいくて、心がほんわかします。

「では、帰りましょう！」

『かえる……？』

ミュナはなぜか、帰ることに戸惑っているようです。

『……リシェラ、いろいろくだもの、すき?』

「きいろいろくだもの?」

『ながいね、あまい、おいしい!』

「あつ、わかりました。バナナですね!」

バナナは南方から輸入される高級食材です。

マリスヒル伯爵家の養女となつてからは、食べたことはありません。

「バナナ、おいしいですよね」

『こっちある! リシェラ、かえるね』

私と手を繋いだミュナは、迷いのない足取りで木々の間を進んでいきます。

進む方向がわかるようです。

ミュナは木々の枝を飛び回るように移動し、ポケットの中の木の実の匂いも嗅ぎ取れました。特別な感覚を持っているのでしょうか。

気になるのは、帰る話をしたとき、少しだけ困つたような顔をしていたことです。

ミュナは服も食事もいいものを与えられて、大切にされているように思えますが……

『リシェラ、みて!』

ミュナの指す茂みから、黄金色の毛並みをした大きな犬が飛び出しました。

その瞳は青く澄み、額には同じ色の魔石が光を弾いています。

あれは、犬の魔獣……?

「セレイブ、いたよ!」

犬の魔獣が人のように話すと、その背後から銀髪の男性が姿を現しました。

氷の彫刻のように涼しげな美貌、引き締まった長身。黒を基調とした上質な衣装が、彼の存在感を際立たせます。周囲の空気までもが、ひんやりと冷たくなった気がしました。

「君は……」

アイスブルーの瞳に見つめられ、私は吸い寄せられたかのように動けなくなりました。

そのまま見つめ合っていると、分かれ道の向こうから硬車こうきやが現れました。

「邪魔だ平民! マリスヒル伯爵令嬢、エレナ様がお通りだ!」

硬車は馬車のような乗り物で、馬ではなく硬液という燃料をタンクに詰めて動力にしています。

車輪の荒く回る音が迫ってきました。

『こわい!』

ミュナはぎゅっと握っていた私の手を振りほどき、そのまま道へ飛び出しました。

硬車は車輪の乱暴な音を立てながら、転んだミュナに迫ります。

「ミュナ、危ない!」

気づけば駆け出していました。雪解けの泥に足を取られてふらつき、ボロボロの靴のストラップが千切れます。それでも構わずミュナに駆け寄り、抱きしめた勢いのまま身を翻すと、なんとか硬車にぶつかることは避けられました。

「痛くありませんか?」

『……いたくない。可愛い』

「怖かったですね。でももう大丈夫ですよ」

フードをそっとかぶせて、猫耳を隠します。雪解けの泥でぐちゃぐちゃになっていましたが、無事でよかったです。

急いで道の脇へ移動すると、硬車がすぐそばに止まります。

「あら、お義姉様じゃない！ 相変わらずみずばらしい服装だから、すぐにわかったわ！」

元義妹のエレナは、私を見下ろして鼻で笑っています。

いつも通りの振る舞いです。まだ、ライハント王子が私を捕まえようとしていることを知らないのです。

「なにその子。高そうな服を着ているから誘拐して、親に身代金でも要求するつもり？ ふふつ、貧乏人って惨め！ エレナが衛兵に突き出してあげる」

エレナがお金をちらつかせて命じると、従者がこちらへ近づいてきました。

「マリスヒル伯爵家では、暴言を吐きながら硬車に乗るのが礼儀なのか？」

従者から私たちを守るように、銀髪の男性が立ちはだかりました。

低く落ち着いた美声です。佇まいも静かで洗練されています。

彼を見たエレナの目の色が変わりました。

「そつ、その麗（うつく）しいお姿は！ セレイブ・ロアフ様ではありませんの!?」

「セレイブ・ロアフ!? まつ、まさか……!! 世界最強の凶悪騎士!?!」

「危険な魔獣すら服従させる、冷酷な、あの!」

彼の名を聞いた御者と従者は、声を上ずらせてうろたえています。

「先ほどの失言、お許しください!」

「失礼致しました!」

「なんのことだ。謝罪する相手は俺ではない」

セレイブ・ロアフ卿が冷ややかにたしなめると、御者と従者は震え上がりました。

「無礼な振る舞い、申し訳ありませんでした!」

「すみません……!」

ふたりは私とミュナに対し、頭を下げた謝りはじめます。

でもエレナが謝罪する様子はありません。ドレスを翻して硬車から降りると、自信たっぷりに髪をかき上げました。

「セレイブ様のことなら、よく知ってるわ! “世界中の女性を虜にする氷銀の美貌” って、『スイトハート』に載っていたもの!」

「そのゴシップ誌はソディエ王国の流通禁止リストに載っている。君は裏取引でもしているのか?」

「そつ……そんなことより! エレナは国王陛下と王妃殿下から、国一番の美女だって褒められているの! ふふつ、セレイブ様が『誰の縁談も受けない』って公言しても、エレナには興味あるでしょう?」

「いや、まったく」

ロアフ卿は冷淡に否定し、エレナに背を向けました。そして私とミュナのそばにしゃがみます。静かな眼差しが、ミュナと私を交互にとらえます。氷のようなアイスブルーの瞳、麗しすぎる顔立ち……見つめられることすら恐れ多い気がします。

「身体の痛みはあるのか？」

「ないと言っていました。大きな怪我也見当たりません」

「君は？」

「私……ですか？ 私は平気です」

「そうか。では行こう」

ロアフ卿は、ミュナを抱えた私を軽々と横抱きにしました。私が泥だらけでも、ためらう様子はまったくありません。

「あ、あの！ 私は歩けますから、下ろしてください！」

「なぜ？ 君の靴は壊れている」

「私なら平気です。あなたの上着を汚したくありません」

彼の無表情が一瞬、柔らかくなった気がしました。

「君は自分が汚れるのも気にせず、ミュナを守った。それと同じ……俺は君のためなら、汚れることなど構わない」

ミュナの名前を知っている。ということは、ロアフ卿はミュナの……？

「近くに俺の別荘があるから、念のため侍医に見せよう。君にぴったりの靴も贈らせてもらう」

「ま、待つてセレイブ様！ あなたの別荘にはエレナが行きますわ！」

「君を呼んだ覚えはない」

はつきり断られても、エレナは諦めようとしません。ロアフ卿に駆け寄ると、わざとらしくふらついて倒れ込みました。

彼が避ければ、エレナに怪我をさせてしまう。それを見越しての、いつもの手です。

「危ないな」

ロアフ卿は私とミュナを片腕で抱き上げると……えっ!?

迫るエレナの顔を、空いた片手でガシッとつかみました。

「彼女は靴が壊れて不自由している。見てわからないのか？ もう近づかないでくれ」

ロアフ卿は冷徹に忠告すると、エレナの顔を淡々と押し返します。

辺りは静まり返りました。

「ジンジャー」

「任せて！」

ロアフ卿の隣にいた犬の魔獣が答えると、その青い瞳が輝き、空中に水の球体が浮かびました。その澄んだ水で、ロアフ卿はエレナに触れた手を清めます。

私のせいで付いた泥は気にしないのでしょうか……

エレナは見たことのない表情で呆然としています。でも我に返ったように目を瞬かせると、眉を折り上げて叫びました。

「ひどいっ！ エレナはこんなにかわいいのに、なんで！ 無視するのはお義姉様にして！ 成人するまでに縁談ひとつなかった、売れ残りだもの！」

エレナの言葉に、ロアフ卿はじめて興味を示したようで、私とミュナを抱いたまま振り返ります。

「それは本当なのか？」

「えっ？ そ、そうよ！」

エレナは彼の気を引くことに成功して、満足したようです。私を見て意地悪な笑みを浮かべました。

「しかも伯爵家から絶縁されたの！ ふふっ。だからセレイブ様、お義姉様は——」

「俺が求婚できるということだな」

「ふへっ!？」

エレナは目を剥いています。私も耳を疑いました。

「ろ、ロアフ卿？」

「セレイブでいい。君の名を聞かせてくれるか？」

「リ、シエラです」

「リシエラ……？ もしかして君は、北方のフロスベイン王家の血筋ではないか？」

「は、はい。母はフロスベインの王女で、私にリシエラと名付けました」

「お義姉様が、王女の娘!？」

エレナは啞然としていますが、ロアフ卿は納得したように頷きました。

「フロスベインの聖なる島には、リシエラという七色に輝く花が咲く。君の母君はきっと、君をあの美しい花のように愛おしく思っていたのだろう」

母のことを少し知ることができた気がして、嬉しくなりました。

「リシエラの花、いつか見てみたいです」

「俺は聖騎士時代、その島のひとつを賜^{たまわ}っている。君なら喜んで案内する」

「セレイブ様、お義姉様よりエレナの方があなたにふさわしいわ！」

エレナは注目されないことに腹を立てたようで、ロアフ卿に向かって叫びました。

「だってお義姉様はお父様に追い出された、身寄りのない平民なの！」

「つまり俺は誰にも遠慮することなく、リシエラを口説いても構わないということか」

「そっ、そうじゃなくてエレナの方が」

「リシエラ、君のことが知りたい。俺の別荘で君の話を聞かせてほしい」

もしかしてロアフ卿、私をこの場から連れ出そうとしてくださっているのでしょうか？

ただ、求婚までしてくるのは不思議ですが……騎士の人助けて、スケールが大きいのかもしれません。

「は、はい。助かります。よろしくお願い致します」

「礼を言うのは俺の方だ。君に拒否されても連れていくつもりだったが、どうやら嫌われずに済みそうだ」

エレナはわなわなと震えながら、すべての元凶が私だと言わんばかりに睨みつけてきました。「もう許さないわ！ お義姉様が意地悪したって、お父様に怒ってもらうんだから！」

「リシエラは君になにもしていないし、言ってもいないと俺が断言する。これ以上迷惑行為を続けるのなら、こちらも厳しく対処する」

もう十分、厳しくされているように見えますが……

ロアフ卿は私とミュナを抱き上げたまま、来た道を引き返しはじめます。

「そんな！ セレイブ様、待つ……！」

追いかけてようとするエレナを遮るように、低い唸り声が上がりました。

ロアフ卿のそばに控えていた犬の魔獣が、今にも噛みつかんばかりの剣幕で牙を剥き出しています。

「イヤアアツ、獣っ!!」

エレナは両親からかわいがられ、私を引き立て役にしていました。それが今は犬に吠えられ、意中の男性にわずらわしがられているなんて不思議な光景です。

ロアフ卿が三叉路の一本の角を曲がると、エレナの姿は見えなくなりました。

でも、あの様子です。エレナは私に仕返すため、ロアフ卿といたことを家族に話すでしょう。元養父に捕まったら、私はライハント王子に売られます。

「何度も振り返っているが、誰かに追われているのか？」

「い、いえ……」

ロアフ卿には私の焦りが伝わっているのでしょう。でも、ライハント王子が私を捕らえようとしているのは、巻き戻る前の記憶です。今の私を知っているのは不自然なので、口ごもってしまいます。

「リシエラを連れ出すことに夢中で、自己紹介を忘れていた。俺は怪しい者ではないから、安心してほしい」

ロアフ卿は私を片腕で抱えながら、懷から紋章入りの身分証をいくつも取り出しました。

「俺はセレイブ・ロアフ。ロアフ辺境伯家の次期当主であり、現在は騎士団長を務めている」

エレナが夢中になるのも頷ける、すごい人物のようです。

「ロアフ卿があの場合から逃がしてくださったので、助かりました。ありがとうございます」

「気にすることはない。君は絶縁した家で、ずいぶんひどい目に遭っていたようだ」

さらりと言う美貌には、強者の余裕が滲んでいます。

ロアフ卿のような方なら、どんなことでも自力で解決してしまいそうです。

「あの犬の魔獣さんは大丈夫でしょうか？」

「ジンジャーは優秀な使役獣だ。あのような小物など、取るに足らない。彼らを追い払った後は別荘へ向かい、ミュナがリシエラに保護されたことを報告しているだろう」

それほど優秀なジンジャーを、ロアフ卿は使役する方なのです。彼の言動からは静かな強さが感じられて、ミュナはもう大丈夫だと思えました。

「あの、ロアフ卿はミュナの……」

「叔父だ。後見人をしている」

言われて納得しました。ふたりとも髪や目の色こそ違いますが、整った目鼻立ちが似ています。

「別荘からミュナが行方をくらましたため、誰かに連れ去られたのではないかと案じていた。先ほどの傲慢な女に獣人の姿を見られていれば、間違いなく危害を加えられていただろう」

「獣人って……はじめて聞きました」

「そうかもしれないな。獣人は非常に珍しい存在で、わかつていないことも多い。突然姿が変わる者もいれば、生まれたときからその姿の者もいる。身体能力は、動物のように優れている」

たしかに、ミュナが木の上でもへっちらな顔で飛び回っていたときは、びっくりしました。

そんなミュナは今、私にしっかりと抱きついたまま、寝息を立てています。

「リシェラは俺たちの恩人だ。ありがとう」

「お氣になさらないでください。私もミュナくらいとき、グミブドウを摘みに行つて迷子になったことがあります」

「グミブドウ？ あれはブリザード侯爵領の固有種だ」

「養女になる前、よく食べていたんです」

「……そうか。君はフロスベイン王女の娘だったな」

ロアフ卿の聲が曇ります。私の両親の政略結婚や、私が家族との交流を望めなかった事情を察したのでしょう。

「でも、さびしくはありませんでした。乳母のヘレンがいてくれましたから」

「リシェラを育てた人か。その乳母は、どのような人物なんだ？」

「ヘレンは私の母の侍女でした。母が興入れする前から仕えていました」

母の話も、フロスベインのことも、やさしい手のぬくもりも。全部、ヘレンが教えてくれました。

「彼女は料理が上手で、よく母の好きな食べ物を作ってくれました」

「フロスベインの王女の好む食事……祖国の宮廷料理だろうか？」

「母の一番好きな食べ物は、ヘレンのアップルパイだったそうです」

それは幼い私が両腕でずっと抱えられるほどもある、大きなパイでした。

焼き上がると、部屋いっぱいに甘く芳醇な香りが満ちて……使用人の方たちも誘って、みんなで笑い合いながら食べたのです。

「生地を頬張るとサクツとして、リンゴの酸味と甘さが口の中に広がって、蜂蜜色の果肉がとろけるように柔らかくて……」

「君が話すと、その味わいまで伝わってくるようだ」

「ふふっ、本当においしいですよ！ ロアフ卿の好きな食べ物はなんですか？」

「俺は好き嫌いが無い。あるものを食べるだけだ」

そのような人もいるんですね。でも私に質問するロアフ卿はどこか楽しげです。

「ロアフ卿はヘレンの作るアップルパイにご興味があるのですか？」

それなら、ぜひあのおいしさを知っていただきたいです。

「私の生家には、ヘレンのレシピがあると……あつ、でも。絵本と一緒に、捨てられてしまったか

もしません」

私は実父に養女となることを命じられ、部屋に戻ることも許されず硬車に乗せられました。胸に抱えていたのは一冊だけ、子供向けの北方事典です。彼にはじめて呼び出されて、母の話ができるかもしれないと期待して、持っていたのです。

ロアフ卿はまるで自分のことのように、沈んだ声でつぶやきます。

「それはリシエラにとって、大切なものだろう……」

「そんな悲しそうな顔、しないでください。私にはヘレンと笑って、母の話をして、おいしい香りに包まれた思い出があります。それがなによりの宝物ですから」

ロアフ卿はなにか言いかけ、しかしそのまま言葉を失っていました。

もしかして、失礼なことを言ってしまったのでしょうか。

恐る恐る顔を上げると、彼の眼差しがまっすぐ私に注がれていました。

その瞳は氷のような色なのに、なぜかあたたく感じました。私の胸の奥で、静かな鼓動が少しずつ速くなっていきます。

「君は……過去も痛みも、すべてをやさしさに変えてしまうようだ。先ほどの高慢な令嬢とは……いや、俺の知る誰よりも、君は美しい心の持ち主なのだろう」

私のことを否定しないなんて、ロアフ卿は今まで周りにいた人と違います。

「それにリシエラと話していると、今まで気に留めていなかった食というものに、新たな発見がある。愛情深い乳母の存在が、君の食への想いを深めたのだろうな」

「難しいことはわかりませんが……私はヘレンの料理が大好きでした。友達から食材をもらうたびに彼女のことを思い出して、自分なりに再現したりしました」

「それはうまそうだ。リシエラはどのようなものをよく作る？」

彼に聞かれるまま、私は自分についてぼつぼつと話していました。

弟がとてもかわいいこと、昔好きだった遊び、ヘレンとの日々……

彼とのひとときは、忘れていた懐かしい風景や感情が、胸の奥から溢れてくるようでした。

「話せば話すほど、リシエラの心の美しさと感性の豊かさに惹かれる。俺も君となら……」

「？」

「リシエラ、別荘に着いてからも君と話したい。その間に君の靴や衣装を弁償する」

「お気持ちだけで、十分嬉しいです。私はただ、大好きなミュナの力になりましたただけです」

ロアフ卿はハッとしたように私を見つめます。

「大好きなミュナ……ということは、君は以前からミュナのことを知っているのか？」

「え？ いいえ、そうではないのですが、でも……」

私は腕の中で眠るミュナの重みを、改めて感じます。

「会ったばかりでも、私はミュナが大好きになってしまいました。そう思えるのって、とても幸せなことですね」

母は私を身ごもったとき、そう言ってくれたそうです。

「そのような感情を……俺は一生、理解できないのだろうな」

「どうしてそう思うのですか？」

「街の噂で聞いたことがあるだろう。俺が冷淡で、人の心を持ち合わせていないと」

きつと誰もが知る話なのでしょう。でも私は社交界に出ることもなく、壊れかけた小屋で動物と過ごしてきました。当たり前のことですら、知る機会がありませんでした。ただ……

「私はロアフ卿とお話して、とても感性の豊かな方だと思いました」

アイスブルーの瞳が驚いたように見開かれ、私を見つめてきます。

「……俺が？」

「ロアフ卿は私に、これまで誰も聞かなかったことを尋ねてくれました。それに私の話に頷いたり、そつと目を伏せたりして……あれは演技だったのでしょうか？」

「いや、俺は……」

ロアフ卿は自分の心と向き合うように、少しの間沈黙しました。

「俺はただ、リシェラのことを知りたかった」

それはきつと、私がミュナを保護したことが関係しているのでしょう。彼が私を「恩人」と呼ぶ様子からも、ミュナを大切にしていると伝わってきました。

私の腕の中で小さな身体が身じろぎします。

「ミュナが目を覚ましたようです」

ミュナは寝ぼけ眼でしたが、私を見上げて笑みを浮かべます。

「安心して下さいね。無事にロアフ卿のもとへ帰れましたから」

「ミュナ、もうひとりでいなくなってくれ」

『！』

ミュナはロアフ卿から顔を背けて、怯えたようにぎゅっと抱きついてきました。

こんなに萎縮^{いしゆく}して、どうしたのでしょうか。今にも泣き出しそうです。

『こわいかお、おこつて……』

こわいかお？

ミュナは人の言葉が理解できずに、ロアフ卿が怒っていると感じているのでしょうか。

「怒っていませんよ。ミュナを心配しています」

『こわいかお、ミュナしんぱい？』

ま、まさか……『こわいかお』とは、ロアフ卿の呼び名でしょうか。

たしかに、凜とした目元に淡々とした口調です。言葉が通じなければ、怖く感じてしまうのかもかもしれません。

でも氷銀と称^{なづ}えられる美貌が、『こわいかお』呼びされているなんて……

「ミュナは……俺が怒っていると思っているのか？」

「え、ええ。おそらく……」

私は言葉を濁^{にご}します。

ロアフ卿はミュナの猫耳を嫌がる様子はありません。でも私が動物と話せると知ったら、さすがに気味悪がるかもしれません。

ミュナとの会話は、私が一方的に語りかけているように見せることにします。

「……」

ロアフ卿はいつになく険しい表情で沈黙しています。

もしかして私の力のこと、もう気づかれてしまった……？

「俺はミュナに嫌われている」

突然、深刻な口調で告白されました。

「どうやらミュナは、俺たちの言葉がわからないようだ。そのためか人を避け、俺に至っては魔王のごとく恐れられている……まあ、よくあることだ。子供はみな俺に怯える」

ロアフ卿は子供と関わるのが苦手なようです。

「ミュナが俺の顔を見て大泣きしなかったのは、今回がはじめてだ」

「それはよかったです」

「リシエラがいてくれるからだろう。普段のミュナは、俺を見るだけで震え、声をかければ耳をふさぎ、微笑みかけると泣く」

最強の騎士が、まさかの惨敗……

「そのため、俺はミュナとの関わりを極力避けている。世話も、子供に慣れた使用人に任せて……後見人を名乗りながら、この有様だ」

もしかしてロアフ卿、ミュナともっと関わりたいのでしょうか。

でも大切に想うほど、傷つけることを恐れているのかもしれませんが。

「俺は子供と良好な関係を作るのが、これほど困難な道だとは想像もしていなかった。この状況と比べれば、ジンジャーの反抗期や各国を襲う凶童など他愛ないものだ……しかし、ミュナと兄のためにも諦めるわけにはいかない。友好的に交流する方法は必ず探し出す」

苦しげに吐露する様子から、ひとりで抱えきれない悩みなのだと伝わってきます。

「ロアフ卿は素敵な方ですね」

彼の無表情が揺らぎました。

ロアフ卿は信じられないといった様子で、その美貌に困惑を浮かべています。

「……情けないの間違いだろう？」

「どうしてですか？ ロアフ卿は悩みながらも、ミュナを幸せにしようとしています」

それは彼が冷淡ではなく、愛情深い方だからです。

「だから情けなくありません。あなたは素敵な方です」

につこり笑って伝えると、ロアフ卿はかすかに目を開き、ふいと顔をそらしてしまいました。ちらりと見えた顔が赤くなっていたのは……見間違い、ではない気がします。

「君は不思議な人だ。俺は今まで功績ばかりを称えられてきた。苦手なことについて、こうして誰かに認められたのははじめてだ」

他の人の考えはわかりません。でも私は、そう感じました。

「幸せなことだな」

「……え？」

「君が教えてくれた。『会ったばかりでも人を好きになれるのは、とても幸せなこと』だと」

「あつ、はい。私もそう思います」

私との何気ない会話で、ロアフ卿がミュナへの想いに自信を取り戻せたのなら。こんなに嬉しいことはありません。

「実は俺の兄、ミュナの父親は亡くなっている。俺がジンジャーを拾ったときも、聖騎士となると決めたときも、彼は味方になってくれた。そんな兄が俺を信じて、ミュナを託してくれたそうだ。俺はミュナの後見人となることに迷いはなかった」

こんないろいろな話してくださるなんて、私とのやりとりで、なにか感じてくれたのでしょうか。『だがミュナは俺をはじめ、人を恐れている。俺はその問題を解決する手がかりを求め、このマリスビル伯爵領に来了。そして別荘に着いた慌ただしさの中、ミュナが木々を飛び移りながら行方をくらましたため、慌てて捜し回っていたのだが……』

「ふふっ」

ミュナの天真爛漫な姿を思い出して笑うと、ミュナとロアフ卿は同時に私を見ました。その表情がよく似ていて、ふたりの血の繋がりを感じます。

誤解ですれ違っているなんて、なんだかさびしいです。

私はミュナにささやきかけます。

「ミュナの行動力はすごいですね。でも、ロアフ卿はミュナが大切なので、とても心配していました。これからは、ひとりで出かけたりしないでくださいね」

ミュナはかぶっているフードの下で、猫耳を立てて聞いていました。

別荘へ戻ることをためらっていたのは、言葉の通じない不安があったからかもしれません。でも自分で帰ると決めたのですから、ロアフ卿が嫌いなわけではないはずです。

「リシェラ、ミュナに俺の気持ちを伝えてくれて、ありがとう」

穏やかな声で言われ見上げると……あつ、ロアフ卿が笑っています。

彼の笑顔が素敵だと知ったのは、このときがはじめてでした。

第二章 別荘でのもてなし

ロアフ卿の壮麗な別荘の門をくぐると、ジンジャーが尻尾を振って迎えてくれました。

「リシエラ、待ってたよ！ 悪い奴が来ても、僕たちがリシエラを守るからね！」

「ありがとうございます、ジンジャー」

エレナを威嚇した迫力は本物でしたが、今は人懐こい犬にしか見えません。

「あのジンジャーが気を許すなんて……」

ずらりと並んだ使用人たちは、驚きの声を漏らしたかと思うと、私に向かって一斉に頭を下げました。

「リシエラ様、ミュナお嬢様を保護していただきましたこと、心より感謝申し上げます」

元養家の使用人たちとは違い、彼らの振る舞いからは感謝ともてなしの心が伝わってきます。

ただ私はロアフ卿に抱き上げられたままなので、ちよつと恥ずかしいのですが……

『たくさん、ひと……おこつてる』

私の腕の中にいるミュナは人々から顔を背けて、しがみついています。

「怒っていませんよ。ミュナが帰ってきて、みんな喜んでいます」

『よろこんでる……？』

「ミュナお嬢様、よかった！」

突然若い女性が、三つ編みを振り乱してやってきます。そして私に深々と頭を下げました。

「ミュナお嬢様を保護してくださって、本当にありがとうございます！ なんとお礼を申せばいいのか……あつ、お嬢様、どうぞこちらを」

三つ編みの女性は、青いリボンの付いたカチューシャをミュナに着けようとしています。

でもミュナは顔を背けて私にくつつき、怖がっているようです。

『あおいの、それなに……？』

「これはカチューシャという髪飾りですね。ミュナに似合いそうですし、私が着けてもいいですか？」

独り言のように説明すると、ミュナが頷きます。

私は三つ編みの女性からカチューシャを預かり、着けました。

「お嬢様が、安心したような表情をしているわ……！」

静かな驚きが満ちる中、私はミュナの姿の変化に驚きました。

「あつ、ミュナの猫耳と尻尾が消えて……！」

「カチューシャの青いリボンの力です。遠い地の植物、ヘンゲザクラという特殊な染料の効果だと聞きました」

「ヘンゲザクラ、はじめて聞く言葉です。変身魔法みたいですね」

動物を嫌うこの国では、獣人の姿はヘンゲ……変身して隠した方が安全です。